【野菜】 今後の管理と病害虫対策について

令和7年8月1日
県北農林事務所農業振興普及部

1 露地きゅうり

【栽培管理】

- ア 不良果(曲がり果、尻細果等)は小さい時に摘果し、草勢を維持する。
- イ 高温乾燥時には、1株あたり1日2Lのかん水量を目安に、窒素成分で0.2～0.3kg/10a施用する。早期に生育を回復させたい場合は、葉面散布やかん注も併用する。
- ウ 地際から40～50cmまでの茎葉を整理し、通風を確保する。
- エ 葉の萎れが続く場合は、蒸散抑制剤等の葉面散布を行う。
- オ フケ果の発生を防ぐため、収穫物を直射日光に当てない等、品温の上昇を抑える。また、収穫コンテナの保管場所にも注意する。
- カ 敷きわらが手に入る場合は、地温上昇抑制効果があるため活用する。

【病害虫対策】

- ア ベと病
 - ・ 肥料切れや成り込みによる草勢の低下が発生を助長させる。
 - ・ マルチ、敷きわらにより雨水の跳ね上がりを防ぐ。(炭疽病と共通)
 - ・ 風通しを良くする。(炭疽病と共通)
 - ・ 肥料切れが発生を助長するため、追肥は遅れないよう早めに行う。
 - ・ 防除を行う際は、葉裏にしっかりと薬液が掛かるように散布する。
- イ 炭疽病
 - ・ 適切な肥培管理を行う。特に窒素肥料を多用しない。
 - ・ 罹病葉は第二次伝染源となるため、発病初期の罹病葉除去と、降雨前の薬剤散布を徹底する。
 - ・ 被害残渣はほ場外に持ち出し処分する。
- ウ ハダニ類
 - ・ 高温、乾燥条件下で増殖が盛んになり、梅雨期に降雨が少ない年には発生が多くなる。好適条件下では約10日で卵から成虫になる。
 - ・ 低密度のうちに薬剤散布を行うとともに、異なる作用機構の薬剤によるローテーション散布を心掛ける。
 - ・ 敷きわらを行っている場合は、敷きわらに寄生している可能性があるため、敷きわらにも薬剤がかかるよう散布する。

2 ミニトマト

【栽培管理】

- (1) ハウスに遮光資材を被覆する。(遮光率30%目安)
- (2) ハウスのサイドや出入口等をできるだけ開放し換気する。
- (3) 収穫を終えた花房より下を摘葉し、地際の風通しを良くする。

- (4) かん水を晴れた日は1株/1日あたり2～3Lを目安に行い、畝内の土壌水分量を保つ。ほ場の乾燥が著しい場合は、通路かん水を行う。
- (5) 窒素入り液肥で追肥する場合は、根を傷めないよう薄めの濃度で行う。
- (6) 授粉作業は早朝の涼しい時間帯に行う。
- (7) 送風ファン等を設置し、熱気がハウス内に溜まらないようにする。

【病害虫対策】

病害虫を確認したら早期に防除を行う。また、摘葉・摘果には病害虫が寄生している場合があるため、外に持ち出し処分する。

- (1) オオタバコガ 例年7月から発生が見られる。
- (2) アザミウマ類 乾燥時に発生しやすい。
- (3) ハダニ類・サビダニ 高温乾燥時に多発しやすい。
- (4) すすかび病 例年7月に感染し、8月から多発する。
- (5) うどんこ病 乾燥時に発生しやすい。

3 いちご

【栽培管理】

- (1) 高温によるかん水量の増加に伴い、肥料の流亡が懸念されることから、育苗後半は、葉色や株の硬さを見ながら液肥のポットへの灌注や葉面散布を行い、肥料切れを防止する。使う肥料は窒素成分が少ないものを選ぶ。
- (2) 培土の乾燥と過湿に注意し、夕方以降はかん水や防除を行わず、葉や莖が濡れている状態にしない。
- (3) 高温時は遮光し、過剰な水分蒸発を抑え、かん水回数が増えないようにする。

【病害虫対策】

- (1) 炭疽病
 - ・生育適温は28℃前後。高温多湿が続く7～8月に発生が多い。
 - ・茎葉が濡れている時間が長いほど感染リスクが高まる。
 - ・茎葉の濡れ時間を短くするため、夕方や曇雨天時の長時間のかん水は控える。(高湿度条件を長時間維持しない。)
 - ・7日に1回のペースで防除を実施する。(葉かき時に合わせて)
 - ・クラウン部にも十分に薬剤が付着するように散布する。
 - ・発病株及び周辺の株は速やかに抜き取り、ほ場外へ持ち出し処分する。
※処分する株は肥料袋等に入れて密閉処理する。
- (2) ハダニ類
 - ・葉裏を見て、早期発見・早期防除を心掛ける。
 - ・気門封鎖剤やミツバチ、天敵等に影響のある薬剤を優先的に使用する。
 - ・本ほへの持ち込み防止のため、育苗期後半の防除を徹底する。